

学習・事業の概要

今年度より3年間の予定で地域課題探究型学習が始まります。職員会議で改めて実施計画については説明しますが、今のところ以下のようなことが決まっていますのでお知らせします。

1 ふるさと教育協議会

本校の地域課題探究型学習を推進していくための中核機関です。構成員は以下の教員と外部の専門家3人です。年間2～3回の会合を行うほか、校内の構成員の会議を必要に応じて実施する予定です。なお、第一回協議会は5月13日（月）9時～11時に開催します。

校内委員：校長、教頭、進路指導部長、教務主任、教科・学年代表

外部専門家：小林甲一氏（名古屋学院大学学長）、水野琢也氏（多治見市役所企画防災課）、
小口英二氏（多治見市まちづくり株式会社事務課長）

2 2年生ゼミ学習

従来のゼミ学習の中にテーマを地域課題型探究学習に沿ったゼミを開講します。書籍やインターネットを使った調査に限らず、地域の人々との協働、施設や事業所での調査・実践など様々な活動を追究します。従来のように発表会を実施するほか、成果物を製本することも検討します。

また、3年次に成果を発展して推薦入試やAO入試に活用する生徒が現れることも期待します。こうした入試に関する本校の指導経験を多くの先生方に引き継ぐことができれば、ゼミ学習を進路実現に効果的に繋げることができます。

なお、この分野は進路指導部と学年会が主導しますが、ゼミ活動・指導のノウハウを継承するために教科からのサポートを受けることも検討したいと考えます。

3 生徒向け講演会、体験学習、フィールドワーク

県からの関連予算を活用して、講演会や体験学習を実施します。特に体験学習やフィールドワークはゼミ単位で必要に応じて実施するほか、来年度以降にバスを使って学年単位で県内施設に訪問します。具体的には、5月末の1年生の社会見学を考えています。

4 教員研修会、先進校視察

昨年度までのAL研修会や先進校視察と同様に県からの関連予算内で参加を奨励します。積極的な参加申出をしてください。全国的なイベントや研修会の案内は職員室南白板に案内します。

5 報告書の作成

AL報告書にならない、活動状況を見ながら年度末に成果物を作成します。（文責：教頭）

ふるさと教育協議会の報告

5月13日（月）に第一回目のふるさと教育協議会を開催しました。

最初に事業概要や本校の計画を説明し、佐賀先生と桑原先生の具体案（「土岐川の生物観察調査及び小さな自然再生」、養成小学校での生徒による英語授業実践）を紹介したうえで、3人の外部専門家から貴重なご意見や情報をいただきました。

今号はそのご意見を紹介します。まずは我々教員が多治見など地域の魅力を再発見していくことが大切だと痛感しました。「地域課題探究型学習」とはいうけれど、「課題」という負の視点と同時に「魅力」や「可能性」など正の視点も押さえておくことが大切です。

1 事業の方向性について（どんな力や姿勢を身につけさせたいか）

- 生徒が地域の価値を見直し地域を創造したり地域に戻ってきたりするための力や感覚を養う。
- 生徒が地域について外の人々に向けてプレゼンテーションできる力や態度を養う。
- 生徒が学びを通じて地域の人々とコミュニケーションをとることができる力や態度を養う。
- 生徒がグローバルな視点や活動を持つためにはその土台となるもの（地域）が必要である。
- 生徒が自ら考え対話し動く活動が地域へのイメージづくりや記憶づくりに役立つ。
- 教員が地域を知るための研修を計画してはどうか。企業やイベントなどのツアーも可能。

2 多治見の魅力について

- 春日井は名古屋での消費が多い（地元でもものが売れない）が、多治見は地元消費が多い。
- アマゾンやトヨタは交通の利便性や災害の少なさを考慮して多治見に進出した。
- 土岐川周辺の景観は外の人々にとって魅力となっている。
- 料亭などは周辺地域では閉業しているが多治見では健在で周辺地域から来店する人が多い。
- 多治見に観光で立ち寄る人は多い（街並み、景観、食べ物、体験など）。

3 ゼミ学習のためのヒント（テーマ設定、活動方法など）

- 「トヨタ研修センター」は世界の技術者が注目している聖地である。コンテストも行われる。
- アマゾンは地域貢献を希望している。既に多治見北高がジョブシャドウで交流している。
- 多治見紹介のビデオを公開している。高校生の取材内容をビデオ作成し公開することも可能。
- 「暑い街サミット」では暑さを活用した取組あり（例：熱中症対策製品のマーケティング）。
- 多治見西高が企業展で地元の優良企業とのコラボレーションを実施している。

4 外部機関・団体との繋がり方について

- 多治見市企画防災課や多治見市まちづくり株式会社に関わり合わせれば様々な部署や機関を紹介し繋いでいただける。（例：社会福祉協議会、自治会、消防団、地元優良企業など）
- 委員のお三方に生徒・教員向け講演会で事例やアイデアなどを話していただくことも可能。

（文責：教頭）

過去の事例紹介

本校の地域課題探究型学習ではまずは地域をテーマとしたゼミを開設することになりました。そこで今号は私が過去に本校で指導した地域を研究対象にした3人の生徒の事例を紹介します。ゼミ開設やテーマ設定のヒントにしてください。テーマ設定は研究の成否を決める重要な過程です。生徒任せにせず適切な支援・助言をもとで設定できるようにご指導ください。

1 「多治見市子どもの権利条例と我々を隔てる壁とは何か」(平成19年度)

「多治見市子ども権利条例」は平成15年に制定された全国でも先進的な条例です。周知のように「子ども権利条約」はユニセフと国連が制作し1989年に国連総会で採択し1994年に日本が批准した条約です。しかし、日本では批准後それに関連する法整備が進まず、人権団体や国際機関からの批判の対象となっていました。そのため全国の自治体が独自に条例を制定して条約の内容を実行に移そうとしてきたのです。多治見市の取組はその典型的な例と言えます。

この生徒の取組は、こうした貴重な条例にもかかわらず、なぜ市民や子どもの条例への意識が低いのか。その理念と現実のギャップを明確にして、その要因と対策を考察した研究でした。

2 『多治見方式』は他の自治体にも応用できるか(平成21年度)

西寺前市長が実施した行財政改革は、市長就任時に危機的状況にあった財政状況を大幅に改善し(経常収支比率を平成7年の89.8%から平成平成13年の78%、75%未満が健全化の目安)、当時「多治見方式」とか「多治見モデル」として経営学研究者や行政関係者に知られるようになりました。内容は「財政緊急事態宣言」のもと総合計画を大幅に見直し、市債発行や補助金支出を抑制する一方で徹底した情報公開と市政への市民参加を推進した改革で、これ以外にも縦割り部局主義の見直しや市職員の人材育成など行政内部の改革にも及びました。

この生徒は夏休みを利用して市役所へ出向き市職員から聞き取り調査を行いました。担当者もその問い合わせに熱心に応えてくださり膨大な資料を入手できました。市民である保護者や教師からの聞き取りも踏まえ、多治見方式を自分なりに評価した研究でした。

3 「瑞浪市立中学校統廃合」(平成23年度)

昨年のAL通信でも紹介した事例です。中学校5校が2校に統廃合される問題の是非について全国の学校統廃合の動向と比較しながら探究しました。部活動の顧問が対象地域の住民であったことから、市教育委員会の住民説明会に同伴で参加し問題点を考察しました。その結果、統廃合の理由について、「コンパクトシティ構想」(市の中心部に生活インフラを集中的増設することで利便性を良くし人口を集住させ行財政サービスの効率化を図る手法)の政策的意図を隠し教育問題(いじめ問題や学力向上)に擬装しているのではないかと考察しました。(文責:教頭)

土岐川観察館における事前学習



杉本先生の担当ゼミ「プロジェクトX『土岐川』」では現地へ赴いて専門機関との連携のもとで生物調査を実施しています。今後も活動ごとにHPに掲載予定なのでご覧ください。

本校では2年生における総合的な学習の時間において、各自探究テーマを決め、ゼミ学習として探究活動に取り組んでいます。土岐川ゼミにおいては地元東濃地区を流れる一級河川である土岐川の生物調査や自然再生をテーマに活動をしていきます。今回は、土岐川での生物調査をするにあたり、土岐川の管理をしている土岐川観察館さんの協力を得て、生物採取の方法生物の同定方法や環境保護に関する講義を開催していただきました。生物同定の練習では標本を相手に自分の指の長さを参考に素早く体長と魚種の判断をする練習を行いました。土岐川でどのような生物と出会えるのか、楽しみになってきました。

<生徒の感想>

- ・人間の体温でも魚はやけどしてしまい、素早く同定をしないと死なせてしまうとわかった。土岐川での生物調査の時にはスピードを意識して取り組みたいです。
- ・講座を受けて、土岐川での調査が楽しみになってきました。しっかり目的意識を持って土岐川の生態調査を行いたいと思います。

担当：杉本真弥 佐賀達矢 下総郁子（本校HPに掲載）

地域探究型学習に関連するゼミ一覧

ゼミ	テーマ	場所	人数	主な内容（生徒へのゼミ紹介文）
杉本ゼミ	プロジェクトX 土岐川	生物実験室	18	生徒が多治見市の中心を流れる土岐川の生物調査を行い、自然環境を知り、環境のあるべき姿を考え、科学的根拠に基づいた行動を起こす。高校生が生物調査及び自然再生を発信する。様々な関係機関と連携して活動を行っていきます。
後藤ゼミ	町づくり 活性化プロジェクト	第4マルチ教室	19	多治見市のまちづくり株式会社と連携して、多治見市の商店街を活性化させるために高校生目線で行えることに取り組んでいくゼミです。商店街の地図を自分たちで作成したり、多治見市の情報誌に自分たちの記事を載せたりなど、君たちのアイデアをカタチにして、実践していくことができます！
桑原ゼミ	English& Education	大会議室	16	多治見高校から徒歩5分。養正小学校6年生の英語授業に参加する。実際、小学生たちのサポート役として触れ合う中で、ゼミ生それぞれの視点から研究テーマを設定する。例えば、「教授法〇△✖」「言語習得」「学校は必要か？」「教師の面白さ」「教育心理」「学校間連携」「英語力を生かす仕事」など。
細江 & 児玉ゼミ ※	健康・福祉・医療	2E教室	28	人生の根幹は「健康」である。どんなに才能を持ちあわせていたとしても、使いきれないほどのお金を所持していても、健康体でなければ活かされません。また、健康でなければ労働にも勤められないですね。だから、きちんと睡眠時間を取ろうとか、バランスのいい食事を摂ろうとか、運動をしてみようとか・・・健康のためにいろんなことを考えるわけです。このゼミでは「健康」ということを様々な視点から捉え、探求していくゼミです。
天野ゼミ ※	ことばの魅力	地学教室	20	君たちは普段、どのような日本語を使っていますか？書き言葉や話し言葉、年齢や住んでいる地域によって、日本語はさまざまな使われ方をしています。そんな多様性のある日本語は、実際には君たちの周辺でどのように使われているのでしょうか。インターネット調査やアンケート調査等を用いて、表現豊かな日本語について探求していきましょう。
小澤ゼミ	課題研究とサイエンスショー	化学実験室	18	<課題研究> 日常生活の中で疑問に思っていることを実験、考察を繰り返しながら、解決することをめざします。物理・化学分野を選択し、実験計画を立てるところから始めます。 <サイエンスショー> 小・中学生向けの実験ショーの内容を考え、実際に見せることを通して、実験の技能や難しい内容を分かりやすく伝える力を身につけます。

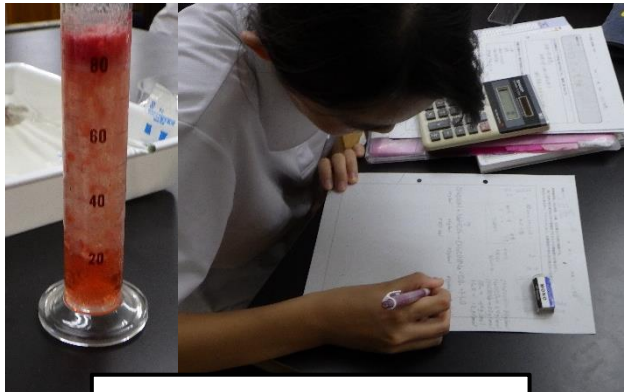
※は一部の生徒が地域探究型学習に関連する可能性のあるゼミ

課題研究とサイエンスショーゼミ：予備実験・その1

「課題研究」と「サイエンスショー」のゼミでは、「調べてみたい、この実験を見せてあげたい」という知的好奇心を大切に活動しています。

テーマが決まった生徒から、予備実験を開始しました。授業で学習した内容を実践的に使うことや慣れない実験操作に悪戦苦闘しながらも意欲的に取り組んでいます。「課題研究」の生徒は年間を通して、実験テーマの解決を目指します。「サイエンスショー」の生徒は、まず美濃加茂市生涯学習センターで8月31日（土）に科学講座のアシスタントを行います。そこで小学生の実態を学び、次の実践へと生かしていきます。具体的には同センターと養正公民館での「サイエンスショー」を予定しています。

(文責：小澤)



実際に行った実験を化学反応式とその係数から、発生する気体の理論値を求めました。

授業の内容が生きて、喜んでいました。



身のまわりの食品に含まれるビタミン C の量を測定する研究を行います。

そのために必要な中和滴定の実験スキルを磨いています。



子どもたちに圧力の分散を体験してもらうための実験器具の製作を行っています。一本一本接着剤で隙間なく釘を立てていきます。

課題研究とサイエンスショーゼミ：科学アシスタント

8月31日（土）に美濃加茂市にある楽習ひろばにて、サイエンスショーゼミの生徒6名が科学講座（絞り染めと傘袋ロケット作り）のアシスタントを行いました。始まるまでは少し緊張した面持ちでしたが、小学生の子どもたちとふれあう中で緊張が解け、一緒に楽しみながら、子どもたちのフォローができていました。参加者の感想（下段に一部掲載）からは彼らが試行錯誤しながら何か手応えを感じつつある様子がうかがえます。

9月28日（土）には、彼ら自身が同じ場所でサイエンスショーの実演を行います。今回小学生の様子を見て感じたことを生かして、本番までの準備に取り組んでほしいと思います。

（文責：小澤）



生徒1人に対して、5～6人の小学生を担当しました。



生徒の感想より

「小学生が話したことを繰り返してからほめると、「そうだね。」と言った時よりも喜ぶことが分かった。」

「思っていた以上に指示を聞いてくれない。どうしたら、聞いてくれるのか考えないといけないと思った。」

「質問攻めにあつた。自分がやる時はもっと詳しくできるようにしたい。」

生徒によるサイエンスショー

9月28日（土）に美濃加茂市にある「楽習ひろば」にて、ゼミの生徒6名がサイエンスショーの実演を行いました。

前日のリハーサルでは、生徒達は表情や表現が硬く、アシスタントの時とはまた違った緊張感に襲われていました。しかし、当日目を輝かせて実験を見守る子どもたちを目の当たりにすると、その様子は一変。堂々とした話しぶりに加え、やりとりを楽しむ余裕すら垣間見えました。楽習ひろばの先生方からも「初めてショーをしたとは思えない。楽しませてもらったよ。」とお褒めの言葉を頂きました。10月26日（土）には、養正公民館にて、同様のサイエンスショーを行います。今回の経験を踏まえて、よりよいサイエンスショーを実演してほしいと思います。



男子グループは小学校3年生、女子グループは小学校2年生の子たちにそれぞれ披露しました。

（文責：小澤）



生徒の感想より

『予想外の質問が来ると困った。次は対応できるようにしたい。』

小学生の感想より

『噴水の実験を見て話を聞いて、もっと理由が知りたくなった。』

『色が変わるパンケーキはびっくりした。私もうちでやってみたい。』

地域探究学習を学ぶ（岩手県）

9月19～20日に堀先生と渡邊完先生が、地域探究学習の特色ある取り組みをしている岩手県立大船渡高等学校と遠野高等学校へ研修に行ってください。今回はその報告です。訪問校からいただいた貴重な資料もあるので、一度ご覧ください。特に「地域で学ぶ」の実践の先進事例として参考になるものが多くあると思います。

【大船渡高校】

「大船渡のことを学ばない大船渡学」として地域に根ざした探究学習活動を研修してきました。一般的な地域学習としては、地域の為に、地域を調べて、地元を知ることが目的となっていることが多いです。しかし、「大船渡学」では、生徒の主体性をはぐくむ探究として、生徒の為に、地元を活用して、生徒自身が学びたいことを学ぶことをゴールに設定してあります。

- ①生徒の主体的な「問いの設定」にこだわる。
- ②仮説検証で実際に現場（地元）に行く、課題解決のための行動を社会（地元）で実践する。
- ③総合的な学習の時間だけでなく、他の学校行事や教科学習に探究の要素を織り交ぜる工夫を実践している。
- ④教員の探究に対する考えをまとめて、学校で統一した指導を実践する。

【遠野高校】

「新しい『遠野物語』を作るプロジェクト」として課題探究学習を実践している遠野高校を研修してきました。この課題探究では地方自治体や地元企業とのタイアップにより、地元でしか出来ない貴重な「経験」をすることができます。さらに一昨年から課題探究の在り方を改善し、その「経験」を「学び」に転移させるための工夫がなされていました。

- ①地方自治体や企業とのつながりを活用し、地元ならではの「経験」ができる。
- ②「地元を学ぶ」だけでなく、「地元を『題材』として、生徒の資質・能力を育む」ことを目標にする。
- ③生徒が受け身にならない工夫として、課題探究活動の期間を目的別に2つに分ける。（前半は地域課題について学び自分ならではの課題を見つけ、後半は自ら得た課題を解決するための実践・検証を行う。）
- ④教員の探究に対する考えをまとめて、学校で統一した指導を実践する。

いずれの高校も地域を活用した特色ある探究活動を行っていました。また実践内容は大きく異なっていますが、生徒が主体的な学びを実現するという学習目標は同じであり、それを実現するには教員間の共通理解のもとで指導を実践することが必要であるということでした。そしてこの学習活動により、推薦入試などで合格する実績を残すことができている。このことは本校の総合的な学習の時間においても共通することだと思えます。生徒の進路実現のため全校体制で取り組むことで実現できることでもあるので、研修した学校を参考にし、本校の学習活動に還元していきたいと思えます。

（文責：堀、渡邊完）

生徒によるサイエンスショー 第2弾

10月26日(土)に多治見市の養正公民館にて、ゼミの生徒5名がサイエンスショーの実演を行いました。2回目ということもあり、会場での準備も手際よく行えていました。当日応募を含めた約20名の小学生の子どもたちを前に、前回の改善を踏まえたサイエンスショーを披露しました。回数を重ねるごとに、学校で見せる一面とは異なる生き生きとした表情が印象的でした。

前半はサイエンスショー、後半はペットボトルの空気砲と傘袋ロケットのものづくり体験を行いました。

(文責：小澤)



生徒の感想より

『後ろの方にも見えるように見せ方を工夫できた。』

『小学生の子たちの声をしっかり聞いてやりとりしながら、見せることができた。』

小学生の感想より

『色々な実験を見れて楽しかった。理科が好きになった。』

『サイエンスショーだけでなく、ロケットとか作ることもできて楽しかった。また来てほしい。』